東京大学『教養学部報』第457号、2002年6月5日、p.3.

たかがガイド・されどガイド

――本と美術展への道しるべ――

今橋 映子

緑薫る気持ちの良い季節、新入生もようやく大学や駒場にも慣れてきた頃だろうか。この学部報でも度々語られることだが、駒場は渋谷に近い絶好のロケーション。街歩きにはもってこいのキャンパスである。

『ぴあ』などという「古典的」ガイドはもとより、インターネットやケータイで「オススメ」情報は溢れているから、今さらお節介かもしれないが、ネット時代になっても、やっぱり便利なガイド本はある。意外に知らない人が多いようなので、今日はちょっと「アカデミック」なガイド本を二冊ほど――。

『東京ブックマップ』（書籍情報社、七八〇円）は、東京都区内にある新刊書店、古書店、大図書館、専門図書館のほぼ「全て」の情報が、（ちょっと厚めの）新書版位の大きさに収まった優れもの。何といっても取り混ぜて多岐にわたる……など、その項目は硬軟この索引方式は図書館部門でも同様。それを眺めていると「明治大学刑事博物館」「日本離島センター」「東京ゲーテ記念館」とか、思いもかけない資料と志を持った図書館がこんなにもあることに、きっと気付くはずだ。毎年更新される版を買い替えていくと、例えば児童書の専門書店が次々と閉鎖を余儀なくされているのもわかり、次第に〈本〉の将来に思いをめぐらすこととなる――。

さてもう一冊のおすすめは『日本の美術館と企画展ガイド』（淡交社、一八〇〇円）。世に美術館ガイドは多種出されているが、私はむしろこの企画展ガイドの方を愛用している。これは一年間分の常設・企画展の計画が、全国一二〇以上の美術館にわたって網羅されているもの。展覧会の内容も、いわゆる絵画展から、仏教関係、民俗学、写真、映画やビデオアート、子供のためのプロジェクトに至るまで、やはり多様だ。この頃は全国で幾つかの都市を回る「巡回展」も多く、それも一目でわかる。

今年の特徴はやはり、韓国関係の展覧会が目白押しということ――今ソウルに住む「李さん一家」のアパート内部の「モノ」をすべて日本に持ってきてしまった（！）企画（大阪・国立民族学博物館）も面白そうだ。夏休み帰京する折、あるいは旅行する折、というより来週のデートコースを決める時にも役立つかもしれない。

最後に一言。ガイドは、あくまでもガイドだ。書店や図書館、美術館での小さな発見や出会いを、どんなふうに育てていくのか――ここからはあなたのセンスと努力にかかっている。

（超域文化／仏語）

東京は「出版」文化の発信地なのだということが実感できる。場所の探しづらい東京のことゆえ、地図はもちろんのこと、定休日、開閉店時間、得意分野や品揃えに至るまで、編集部のスタッフ自身が、「足」で集めた情報が簡潔にまとめられている。私自身、実際にこのガイドで店を訪れてみて、「裏切られた」ことが余りない。特にこのガイドが便利なのは、場所別だけでなくテーマ別の索引が付いている、ということである。例えば「ロシア」「占い」「航空」「写真集」